

2018年6月18日

伊方原爆運転差止広島裁判 第11回口頭弁論期日

意見陳述

意見陳述人：原告（広島原爆被爆者）
広島市安芸区在住・免田裕子（めんだ ひろこ）

本日は意見陳述の機会を与您とてくださり感謝申し上げます。

私が当時安佐郡の西山本で広島原爆の閃光を見たのは、満5才の時でした。今でもはっきり記憶しているのは、3才年上の兄が、「B29が飛んでいる。見に行こう」と私を誘い出し、B29のジュラルミンの機影がキラリと光っていたこと、爆発の瞬間、あたりが真っ白に、今でいうホワイトアウトになったことです。その後しばらくのことは記憶にありません。気がついて兄と2人で幼い妹を探しに行き、やっと探し当てました。ふと気がつくと爆風というのでしょうか、ショックウェーブで家の中はぐちゃぐちゃになっていました。しばらくして「黒い雨」が降って来ました。兄が手のひらを延べて黒い雨を受けました。手のひらに黒いぽつぽつがいっぱいつきました。兄が「これは油だ。油を撒いて後で火をつけて私たちを焼き殺すつもりなんだ」と言っていた言葉が忘れられません。

母は体をこわしており、当時八木にあった病院に入院しておりましたが、異変を聞きつけると4人の子どもが心配だったのか、すぐに病院から西山本に戻って来ました。しばらくすると、市内から原爆で傷ついた人たちが大勢避難して来ました。その中の一人の男性が、雨で黒くなった布袋に入っている米を母に差し出し、「これを炊いて食べさせてつかあさい」と言いました。母がその米を炊いてあげると、その人は母を拝むようにして「ありがとうございます」と言っていました。その後のことは憶えておりません。母は8月23日に息を引き取りました。姉と兄は枕元で息を引き取るのを看取りました。母は目を半開きにして息を引き取りました。今考えると、4人の幼い子どもたちを残して死ぬことに耐えられず、死んでも死にきれない思いで目を半開きにして

いたのではないかと思います。

医科学的にはどうなのかわかりませんが、私は、母の弱って抵抗力のなくなっていた体に原爆の放射能が最後の一衝き（ひとつき）になったのだと思います。原爆で亡くなった人の体からは言いようのない臭いがしていたと聞きます。母の体からも、それ以後嗅（か）いだこともないような臭いがしていました。母の死は原爆死亡者の数には数えられておらず、病死とされているのだと思いますが、原爆の放射能の犠牲者だと考えております。専門家の方々は、低線量の被曝で人体に影響があるのかどうか科学的にはわからない、といっているようですが、私にはどうしても信じられません。

徴兵されていた父が戦死していたと知ったのは小学校3年生の時でした。親戚と一緒に県庁に遺骨を取りに行きました。帰って白木の箱を開けたら中身は空っぽでした。死んだのは敗戦の年の7月1日だと言われています。後で父が死んだというフィリピンのルソン島に行ったことがあります。土地の人たちに聞くと当時日本の敗残兵は山の中に隠れ、多くは病気や栄養失調で死んだそうです。私の父はどのようにして死んだのかと思うと、今でも胸が張り裂けそうになります。

こうして私たち4人は孤児になり、ばらばらに親戚に引き取られました。妹と私は母の里で祖母と曾祖母に育てられました。両親を失った少女時代の苦しさは今でも鮮明に覚えております。“誰のせいでこうなった”と。育ててくれた祖母と曾祖母は、「親がないからと言って負けるな」と、厳しく私と妹をしつけてくれました。その後定時制高校で知り合った夫と死にものぐるいで働き、今日の生活を築きました。

被爆者手帳を取得したのは1975年（昭和50年）7月のことです。すでに2人の娘がおりました。娘には申し訳ないと思いながら、手帳を取得したのは被爆者として発言権をもっておこうと考えたからでした。おおげさにいえば“歴史の証人”として自分をしっかり保っていたからです。父や母の無念の死、私たちが孤児となったこと、抱え続けなければならない放射能の影響への不安—例えば娘が少し体調を悪くすると「私の被爆が影響しているのではないか」と考えてしまいます—それを「戦争だったから」という言葉一つで片付けられてはたまらないと思いました。

原発には最初から懐疑的でした。“核の平和利用”として華々しく宣伝された時代も、原爆と同じ放射能を使った技術だ、決してロクなことにはならないと思っておりました。その後アメリカでスリーマイル島原発事故が起り、1986年には旧ソ連でチェルノブイリ事故が起りました。そして2011年には私たちの日本で、福島原発事故が起りました。その結果、再び低線量被曝の危険が日本中を掩う事態になりました。

ある時広島の繁華街を歩いていると、「広島からもっとも近い原発は四国電力の伊方原発です。伊方原発は今再稼働されようとしています」と、「再稼働反対」の署名を呼びかけるグループに出会い、一も二もなく署名しました。その時まで、伊方原発が瀬戸内海を隔てて広島から僅か100kmしか離れていないことなど知りませんでした。

その後、同じグループの人たちから、伊方原発を止めるために裁判を起こすことになったので原告にならないか、とお誘いを受け、すぐに原告になることに決めました。聞けば、伊方原発は事故を起こさなくても大量のトリチウムという放射性物質を瀬戸内海に流しているというではありませんか。ましてや福島原発事故のような大事故を起こせば、私や私の母が味わった低線量被曝の悲劇が、またこの同じ広島で繰り返されることになります。

幸いにして伊方原発は広島高等裁判所の賢明な決定で現在運転が許されておられません。伊方原発はこのまま運転を許してはならないと思います。原発推進という誤った政策に乗った電力会社の事業のために、放射能によって人の命が奪われたり、被曝による健康被害の不安を抱えながら生き続けなければならない人たちがこれ以上出てはいけません。

どうか広島地方裁判所においても同様に、伊方原発の運転禁止を命ず、と判断していただきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。